



Jun 1030-28.11.2012

massaro TRANS

S.C. MASSARO TRANS S.R.L.

**EFFECTUEAZĂ TRANSPORT PERSOANE
CU MICROBUZE SI AUTOCARE**

BUCUREȘTI - IAȘI

ȘI RETUR, DUPĂ URMĂTORUL PROGRAM ZILNIC

PLECĂRI DIN BUCUREȘTI	PLECĂRI DIN IAȘI
8 ⁰⁰ , 12 ³⁰ , 14 ³⁰ , 17 ⁰⁰ , 19 ¹⁵	1 ³⁰ , 5 ⁵⁰ , 10 ³⁰ , 16 ⁵⁰ , 21 ³⁰

REZERVĂRI BUCUREȘTI:	REZERVĂRI IAȘI:
0788 - 408.299 0743 - 333.517	0788 - 139.961 0743 - 333.500 0232 - 225.500

**CALATORII AU OBLIGATIA DE A SE PREZENTA LA
MASINA CU CEL PUTIN 15 MINUTE INAINTE DE ORA PLECARI**

原寸大の長距離バス切符(上)と料金レシート(左)。

列車の連絡も悪いので、ルーマニアではまだ一度も利用したことがない、都市間長距離バスを調べた。

鉄道駅に隣接してバスステーションがあり、1日5便が運航されている。午前10時半発の便を利用すれば、ブクレシュティ到着は午後6時20分で、私の好みから言えば遅すぎる到着だけれど、我慢出来ない時刻ではない。そんなことで9時半に宿を出発することにした。

インターネットなどで時間を潰し、予定時刻にフロントへ降りる。2泊分の料金は税金などを合わせて310lei(6,723円)だった。良く判らないが予約条件より10lei(217円)安くなったようだ。

どんよりと曇った空の元を駅へ向かう。取り敢えず降られることはなさそうだ。鉄道駅が近くなったところで、英ガイドを取り出してバスステーションの位置を再確認する。慎重に行ったのが良かったのか、そもそも判りやすいところにあったのか、ともかく迷わずに辿り着いた。縦横80メートルと40メートルの四角い土地で木造のターミナルビル(?)をコの字型に囲んで駐車場がある。

ターミナルビルに入って列に並び、窓口でブクレシュティと云ったが、どうやら外のどこかで発券するらしい。表へ出て客引き風の男がうろうろしていたので訊くと、ステーション西側に一列で並ぶプレハブ事務所の端を指して教えてくれた。確かに BUCUREȘTI の文字が赤で大書されている。

2坪ほどの狭い室内にカウンターが二つあり、ブクレシュティと云うと左の方にいた女性が対応してくれた。走行距離はおよそ400キロで料金は40lei(868円)だ。彼女は切符に私の名前と発車時刻を書き込み、レシートをホチキス止めた。

7. ブクレシュティ(2) ブクレシュティ行き長距離バス

11月も28日となり旅も最終ステージを迎えた。ブクレシュティへ戻り一泊すれば、翌日は日本へのフライトだ。前日にブクレシュティまでの戻り方を検討した。列車だと(ブクレシュティまで1時間もかからない)プロイエシティ・ヴェスト駅までは一昨日利用した路線だし、そこから先も既に二回通過している。かててくわえて



長距離バスのチケットオフィス。

外へ出てバスが来ると云われた辺りで待つこと数分、フロントガラスの内側に、IASI-BUCURESTIと大書された表示板を置いた大型バスが入場してくる。メルセデスの新車だ。

不思議に思うのは料金の安さだ。日本ならば400キロ走って3千円以下はまずない。タクシーにも云えることだが人件費は安くても、車体や燃



ブクレシュティ行き大型バス。

料の価格は日本とそれほど変わらないはずだ。それに人件費の占める割合は大型バスならば随分少なくなりそうだし。

ともかくブクレシュティ行きバスに乗れることが確かになった時点で、出発までには30分以上あった。落ち着きを取り戻し、昼食を用意した方が良くと気づき、運転手に一応確認してから、徒歩3分の駅前マクドナルドへ向かう。一昨日と同じビッグマック9.3lei(202円)を一つ買い込んだ。

マクドナルドからバスへ戻ると既に10人弱の乗客が車内にいた。中ほどの右手窓際に席を占める。出発時には7割方の乗車率になっていた。



出発直後の車内。

雨こそ降らないものの、時々薄い霧が流れるような天候で、それでも面白味に欠ける景観の中をバスはひた走る。12時少し前に地方都市ロマンの鉄道駅前で停車し、数人が乗車した。その後2回のトイレ休憩を挟み、ブクレシュティに近づく頃にはすっかり日は暮れていた。ほぼ定刻の6時半にブクレシュティ北駅に隣接するバスステーションに到着する。

此処から今宵の宿アムゼイまでは2.5キロだが、駅周辺で客待ちするタクシーの評判はきわめて悪い。それに2週間前には多少間違えたものの何とか徒歩で辿り着けた。そのときの経験も活かせば何とかなるだろうと、まずはブクレシュティ北駅まで行き、地図を参照しながら歩き出す。しかし夜道だったことも災いし、しばらくして完全に方角を失っていることを自覚する。



トイレ休憩。

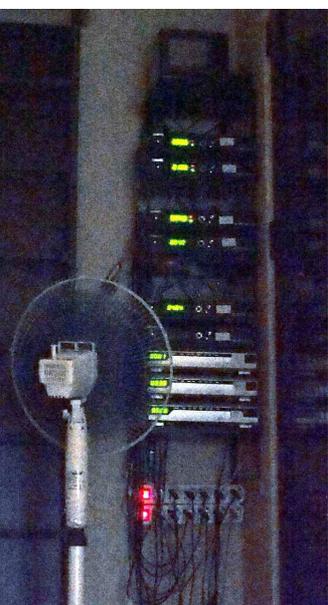


タクシーのレシート。

こんな時には山登りならば引き返すのが原則だが、そこは都会の有り難いところで、タクシーが1台客待ちしていた。人通りなどほとんどないところだから、休憩中だったのかもしれない。大袈裟に云えば地獄で仏、実のところ渡りに舟だ。ともかくカバンにしまってあった旅の資料収納クリアファイルからアムゼイの名刺を引っ張り出して運転手に見せる。

年配の運転手は老眼なのか車内灯の暗い明かりで小さな文字を読み取るのに苦労していたが、しばらくして破顔一笑、「判った」と大きく頷く。それではとカバンをキャリーカートに着けたまま後部座席に押し込みながら乗車する。走ってみるとかなり曲折が多かったのは多少遠回りされたのかもしれない。それでもヴィクトリア通りに出たところで記憶も蘇り、アムゼイ小路への進入は運転手に、「そこを右に」と身振りを交えて指示することが出来た。料金は3.93lei(85円)と馬鹿安だ。気持ち良く5lei支払う。

フロントにいたのは顔馴染みまでは行かないとしても、顔見知り以上の前回と同じ女の子だった。部屋の下見をしようかと訊いてみたところ、この前と同じ部屋だという。Booking.comの方が1€安かったわけで、金額的にはあまり意味がないがオーナーに対する不信感のようなものが芽生えた。ともかく簡単にチェックインが終わり部屋に落ち着く。



アムゼイの無線ランサーバーその他。物々しい割に扇風機で冷却するちぐはぐさがおかしかった。

ヘラストラウ公園再訪

11月28日も曇り空だった。朝食堂は7時半からとのことで、ほぼその時刻に地下の食堂へ降りた。9坪くらいの部屋が二つあり、手前にハム、チーズ、パンその他が皿に盛られたテーブルがあり、奥の部屋に4人掛けのテーブルが六つほど置かれている。先客が一人いたのはオーナーだった。

朝の挨拶を交わしたのち、彼は立ち上がり厨房の方へ声を掛けた。朝食係らしいメイドが姿を現し、飲み物の注文を受けてからも何かと世話を焼いてくれる。4星ホテルならばこの程度のサービスが標準なのかもしれない。しかし根が貧乏性のせい、こんな風にされると反って気ぶっせいで落ち着かない。

そんなことで何となく慌ただしく朝食を終え部屋へ戻る。しばらく食休みののち、久しぶりにバスタブが備わった浴室なのでこれに湯を張って体を伸ばした。風呂はどちらかというと嫌いな方だが、たまにやるとやはり気分が良い。



ビュッフェ方式の朝食堂。品揃えはそれほど豊富ではない。チーフティング(保温装置)の中は空だったが、これは宿泊客が少ない故らしい。スクランブルエッグなどを注文すれば対応してくれる。



バスタブからの水漏れ。

2週間前にはシャワーを浴びたあと、浴室の床にちょっとした水溜まりができてしまい、シャワーカーテンの締め方が不十分

だったと反省した。このことは記憶に残っていたので、慎重にカーテンを閉めただけではなく、シャワーから出る水の向きにも充分気配りして入浴を終えた。

ところがしばらくたってから浴室に入ると、同じような水溜まりができています。改めて仔細に観察すると、水はバスタブの下から湧き出していた。排水管の接続などに不具合があるのだろう。あとで修理を頼む際の説明用に、状況を2枚ばかり撮影しておく。

9時半近くなって部屋でくすぶっていることにも倦み散歩に出た。出掛けにフロントで浴室のトラブルに関し修理を頼むと、ボーイを呼んでくれた。結局彼と共に自室へ戻り、下手な英語で出来るだけ詳細に状況を説明した。「帰ってくるまでに直しておきます。」の言葉に満足して宿を出る。

ブクレシュティでこれと云って訪ねたいところもなかったが、「散歩」ならばヘラストラウ公園が良い。このあいだ歩いたのは広大な公園のごく一部に過ぎなかった。そんなことで以前と同じようにヴィクトリア通りを北上する。ヴィクトリア広場を過ぎると並木道になり、あれからたった2週間なのに秋の深まったことを感じた。

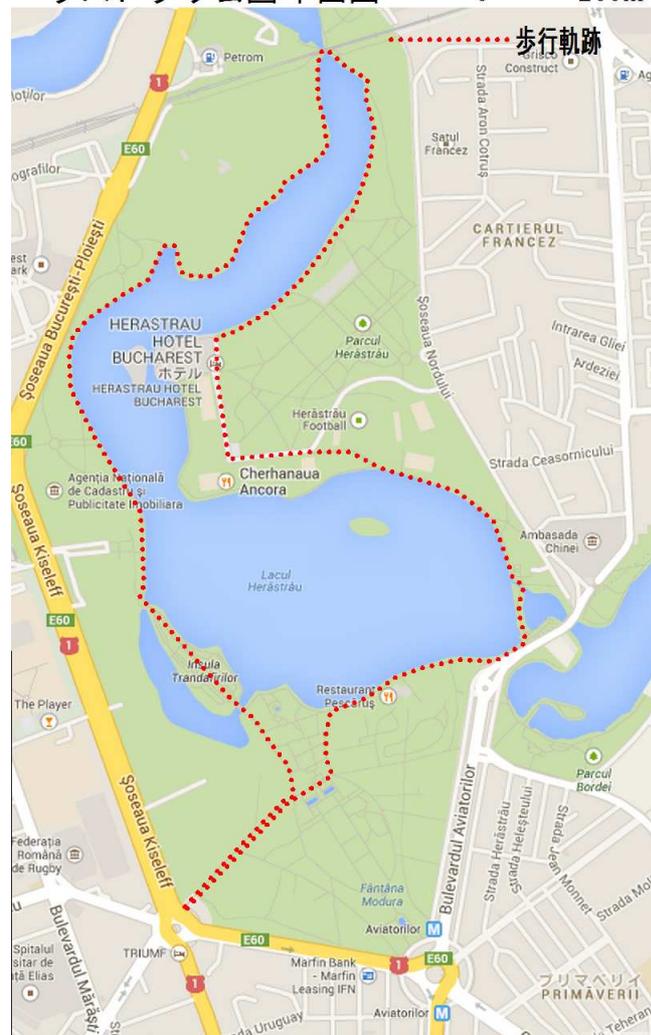
今回も凱旋門のあるロータリーから公園に入る。表参道を思わせる広々した歩道を400メートルほど行き左折して小島へ渡った。左手には農村博物館に移設された木造教会の尖塔が見える。

ヘラストラウ公園は1930年代に、湿地だったこの辺りを干拓し、水門を作って人造のヘラストラウ湖を整備するなどしてできたものだ。元は河川だったので、上流側にはバナエサ湖、下流側にはフロレアスカ湖、プルンブイタ湖などが数珠繋ぎになっている。しかしヘラストラウ湖を周遊するには歩道が整備されているし景観も美しい。それに一周すると7キロ弱の道のりで散歩コースとしては手頃だった。

上: ヴィクトリア通りの並木。国旗は建国記念日(1918年12月1日にトランシルヴァニアをルーマニアに統合)を祝うものらしい。下: ヘラストラウ公園内の資源ゴミのリサイクル容器。左からガラス、プラスチック・金属、紙。ルーマニアを旅して他所で見かけた記憶がない。まだリサイクルは盛んでないのかも。

ヘラストラウ公園 平面図

0 — 200m





上左: 湖の北西部から南東部の景観。

上右: 北西部の湖岸。

下左: 湖の北端で狭まった部分を渡るの鉄道橋の両側に設けられた歩道橋。下右: ラジコンボートは餌撒き用らしい。

300メートル強で再び橋を渡り小島は終わりになる。あとは湖岸の遊歩道を北上した。公園に入ってから一時間で、ヘラストラウ湖の北端に至り、上流のバネアサ湖に繋がる水路がある。鉄橋でこれを渡ると、進路が南転した。

しばらく行って対岸との距離が150メートルくらいに広がったところで、ラジコンボートが水上を航行しているのが見えた。岸边に近付いてみるとオヤジが二人いる。ラジコンファンには見えないし、傍らに架台に載せた釣り竿があることから釣り師だろうと推測する。しばらく観察したところ、ボートを足許まで呼び戻すと荷台に何かを載せて対岸近くまで周航させる。どうやら餌を狙ったポイント周辺に撒くために使う目的で、試行錯誤を繰り返している最中らしい。

推測が付いてしまえばそれ以上見ても仕方ない。岸边を離れてさらに南下し湖の幅が広がると魚をしているらしい舟が数隻見えた。



上左: ペットの糞捨て用ボックスらしい。上右: 公園内で見かけた栗鼠。

下: 糞捨ボックスの文字を拡大。白抜き文字は「きれいな都市のための。」の呼びかけ。



生け簀から撮された魚。

遊歩道と湖岸の間に数軒の魚屋があり、店のスタッフか漁師らしい数人がいた。一般的な魚屋ではなく、ヘラストラウ湖で水揚げされたものの直売所みたいなところらしい。

生の魚、それも30センチかそれ以上の大きさがあるものを買うわけには行かず、しかしちょっと興味を惹かれてカメラを向けた。ところがこちらの動作に気付いたオヤジが、身振りで拒絶の意思表示をする。買わずに撮影だけするのが駄目なのか、とにかく写真お断りなのか判らなかつたが諦めるしかない。



生け簀から魚を移す漁師達。

魚屋から500メートル弱で水門があり、痕跡から現在水位は通常より2メートルほど低下していることが読み取れる。下流に続くフロラスカ湖の水位はさらに2メートル下だ。

水門の上が橋で、歩行者はこれを利用出来る。渡って900メートルほど行くと、先ほど小島へ渡った橋の手前にでた。約2時間で一周7キロを歩いたわけで、ぶらぶら歩きならばこんなものだろう。

12時を回っているので公園散歩を切り上げ、食事場所を求めて町に中心部へ戻ることにした。凱旋門ロータリーからヴィクトリア広場まではこれまでと同じ道を辿ったが、ラスカル・カタルジュウ通りを歩いてみた。この通りとその延長となるマゲル通りはヴィクトリア通りと並んでブクレシュティでは第一級の日抜き通りだ(日ガイド情報)。

しかし実際に歩いてみるとヴィクトリア通りに較べて見応えのある建物は乏しかった。通りの名前が変わるロマーナ広場からマゲル通りを少し歩いて踵を返す。



ラスカル・カタルジュウ通りで見かけた由緒ありげな建物。



上:トマトサラダ。下:焼きウズラ。白いのは茹で卵で緑色はほうれん草。

街を歩いている間に、好みの食堂が見付かれればと思っていたが、探し方(場所)が悪いのか一向にこれほと思える店に行き当たらない。結局2週間前に食事した店ラ・ママを再訪することにした。

店にいたのは前回の二日目と同じおばさんウェイトレスだった。はっきりしないが笑顔の感じからすると私のことを覚えていたらしい。手渡された英文お品書きは内容が一新されていた。その「特製料理」部分で目を惹いたのが焼きウズラだった。

数年前にスペインで食した山ウズラのローストは、珍しさも手伝ったのかもしれないが、良かった印象が残っている。これをメインにしてトマトサラダとハウスワインの赤をグラスで注文する

ところが20分ほど待たされて、注文したものが登場したので撮影後、いざナイフで切り分けようとして愕然とする。ガチガチのに固いのだ。スペインで食べたものは(冷凍物だったかもしれない)生肉を焼いたものだったが、いま眼前にあるものは乾し

ウズラなのか、普通にナイフを入れたのでは切り分けることができない。

一応切り分けても骨から剥がさなければ食べられないが、ナイフを使ってもこびりついて離れないし、齧り付いてみても思うようには行かない。かててくわえてウズラの骨なのでかなり細いから、バリバリかみ砕けばそれなりに食べられてしまう。悪戦苦闘の昼食となったが、供された食物を残せないことは再三書いてきた通りだし、肉そのものの味は悪くなかった。そんなことで半時間弱を要したが一応骨だけ(実際には肉もかなりこびり付いていた)を残して皿の上を空にする。

食後のコーヒーはなしにして、一休みしてから勘定。焼きウズラ55lei(1,193円)、サラダ6lei(130円)、ワイン5杯18lei(390円)、パン1.5lei(33円)だった。

部屋に戻りシャワーを浴びる。入浴後しばらくして浴室に入ると、床に水溜まりができていた。今朝方の、「直しておきます。」が守られていない。直っていなかったこと自体は大した問題ではないが、それを知らん顔で済ませているのが不愉快だ。

夕方になり、買い物に出かける。フロントで女の子に水漏れ修理がなされていなかったことに関し苦情を述べると、彼女は電話で(多分)ボーイに問い合わせた。その結果部品の調達ができなかったため、今日中に修理出来なかったことが判明した。なぜそれを問い糾される前に伝えなかつ

たかと訊くと、「私は知らなかった。」と答える。要するにホテルという組織としての責任感がないのだ。オーナーの見え隠れする軽薄さなどと共に、この宿が嫌いになった。

近所のスーパーマーケットへ入り、晩酌のためにミネラルウォーター2ℓ2.39lei(52円)とチャオ・スティックレティ(グリコ・プリッツのような塩味で細い棒状の焼き菓子。)100g2.09lei(45円)。それ以外は土産としてマギー・牛肉麺60g1.28lei(28円)、マギー・麺60g1.28lei(28円)、マギー・スープ60g1.34lei(29円)、シビウ・チョルバ400g7.27lei(158円)、胃袋チョルバ400g9.16lei(199円)など。これらはチョルバができるようなインスタント食品を探して店員に勧められた結果で、重量は出来上がり状態でのものだろう。

もう一軒、多少高級感のある食品店があったので、真空包装されたハム類を6箇所ほど購入。これはレシートを紛失したので価格などが判らなくなってしまったが、「ルーマニアでは高価だが日本ではさほどでもない。」と云ったところだろう。

帰国と受託手荷物

11月30日はいよいよ帰国だ。こうなれば天候はほとんど関係ないが、それでも晴れているのは何となく有り難い。離陸時刻は11時15分だが、根がせっかちなので7時半にチェックアウトした。二泊朝食付きの料金は648.6lei(14,067円)だった。

空港までのタクシーを呼んで貰う。5分ほどでやってきた車のトランクにキャリーカートに着けたカバンとデイパックをしまい、カメラバッグを持って助手席に乗り込んだ。ヴィクトリア広場や凱旋門ロータリーなど見覚えのあるところを通過し、DN1/E60号線を一路北上する。自動車専用道路ではないが、相互3車線で中央分離帯もあり直線かごく緩いカーブだけだし、交通量も少ないのでタクシーは快走する。16.43キロの走行で料金は24.57lei(533円)。旅も終わりだし30lei支払った。

出発ロビーに入ると面白い荷物梱包装置が目に入った。時間もたっぷりあることだし、しばらく観察する。ストレッチフィルムで梱包するという点では1年前、ブルガリア出国時にやって貰ったのと同じことだが、こちらはより自動化し梱包対象がかなり大型でも難くこなす。

ターンテーブルがあり、その外縁に一本の支柱が立っている。この支柱に添わせて荷物を置きストレッチフィルムを支柱と荷物に一周させると荷物は倒れなくなる。あとはターンテーブルが高速に回転しフィルムが分厚く巻き付けられる。

私のカバンは布製でロックなどないし、ポケットも簡単に開けられる。悪意の操作でなくても、ちょっとしたことで中身を失う可能性があるから包装を頼んだ。料金は判らなくなってしまったが千円以下だったことは確実だ。



空港の荷物梱包装置。インターネットの梱包会社ページより。

ストレッチフィルム巻きされたカバンを受託手荷物にしてチェックインは簡単に終わる。すぐに出国管理を通過して出発ロビーへ。ところが随分早めに来たのでただでさえたっぷりの待ち時間は、モスクワからのSU2034便が大幅に遅れたので2時間以上延びる。

それでも不幸中の幸いと云うべきか、出発ロビーのコーヒーショップでWiFiが使用出来るとの表示を見付けた。ショップ利用者ではなくても使用出来るのかは不明だが、待ち時間が長いので腹も減ってきたところだ。カプチーノ15lei(325円)とクロアッサン9lei(195円)を購入し、ついでにパスワードを教えて貰った。

結局SU2034便の飛来は4時間も遅た。このせいで当初は、「モスクワでの待ち時間が長いな。」と思っていたのがそれどころでなくなる。モスクワ・シェレメーチエヴォ空港着陸後に、「乗り継ぐ方はトランジットカウンターへ...」の機内放送が流された。

ともかくこれに従いカウンターへ行くと、対応してくれたオバサンは、成田へ向かう20人くらいを集め、「これから係りが案内するので、はぐれないように。急いで！」と号令を掛ける。若い女の子が誘導し空港内を全員駆け足で移動。東欧方面のFターミナルから極東方面のFターミナルまでは、広いシェレメーチエヴォ空港のほぼ端から端で、かなりの道のりだ。

それほどまで急ぐ必要もないと思ったものの、「ジイサンが息切れして脱落したか。」と思われるのが業腹で、デイパックを担ぎ、カメラバックとキャリーカートを両手に持って、誘導の女の子に併走する。それほどきついことにならなかったのは、若いとは云っても彼女はタイトスカートにパンプスだからそんな早く走れる訳ではないためだった。

ともかくそんなにして乗り継いだSU262便だが、動き出したのは1時間後だ。それはよいとして、SU2035便が送れたせいで、私の預けた荷物は積み残しとなってしまったようだ。これはかなりの問題で、受託荷物が本人に替わって業者通関となれば、ハム類などは没収される可能性が高い。ハム類を機内持ち込みのデイパックに移す智慧が湧かなかったことが悔やまれる。

ハム自体は質、量のどちらも大したことはないもので、気持ちを切り替える。退屈な夜間飛行中の時間潰しはパーソナルモニター(各座席の前にあるモニター。アエロフロートでも設備されている)を使用した。フリーセルができるのだ。家では、「時間の無駄だ！」とPCから削除してしまったが長距離飛行機中に集中力も低下している状態で遊ぶにはぴったりだと思う。お陰で間に仮眠を挟みつつ、退屈することもなく成田に到着出来た。

入国管理を通過し、手荷物受取場へ行くとアエロフロートの職員が、「モスクワで一部手荷物の積み残し...」と書いたカードを持ちうろろしている。一縷の希望を持ってターンテーブルの前で待ったが、結局駄目だった。アエロフロート職員に声を掛け、自宅へ搬送して貰う手続きをする。

翌日の午後、宅配業者がカバンを配達してくれた。驚い



ストレッチフィルム分厚く巻かれたカバン。

たことに、梱包フィルムが完全な状態で残っている。なんと通関にあたって中身をまるでチェックしなかったのだ。ぐるぐる巻き梱包のお陰か、無事ハムを入手できた。終わりよければすべて良しか？

—— ハンガリー・ルーマニア紀行完 ——